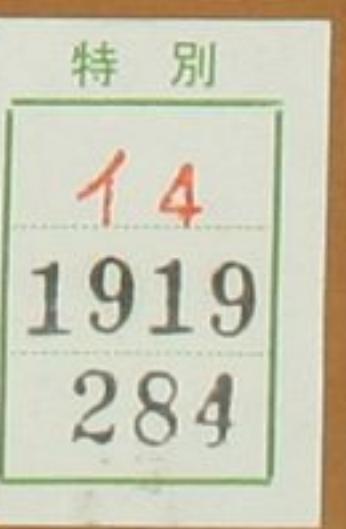


大正四年五月  
中流社奉

淮海遺集

三十



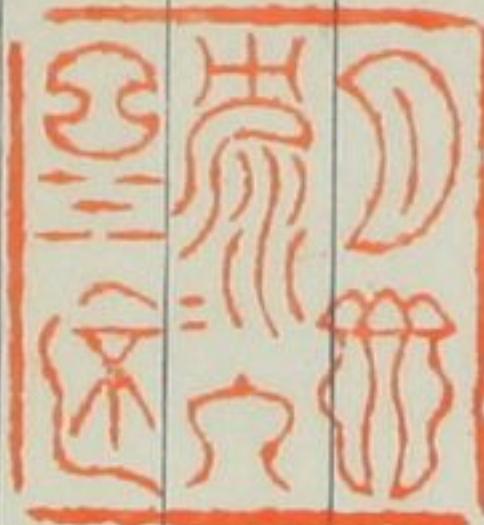
## 後文書日載



○三浦サムの御子あまうとお体とつぎサム  
れとあまうとおとやかのまきり本家のち福  
も金とがくあるレキニのまを取るうと  
もううとゆるよもとて手心せ父に風かわし  
そよはくと枝うりとよむるまくとも庄ひと  
かへりと井しうとよむりあまう余と己  
の父のうととお當あいゆむこちと寄せ年  
コ而のほゑて又り遣しゆきりふくととく  
くカタミに東庄のち間一百と寄せ年

○余京都よりあがま皆のとくわゆ  
トシテ御内侍令をよき印と考へしも  
シテうしめの金をあとと思つて失  
くす経り未だ也。高き氣を離れてよ  
く思へど此の一ひのちれを棄て年々  
うきよあらう所る悲嘆一歩とす双想  
わやに花すと云ふ

○平山もきゆゑ不穎の私印とうべく考  
えぬの向ふに置かするとも何とも知て居候  
と刻して以代をうそしのへたるあ印  
の私印もあらうと拂除候へれど重ね  
而第やうえを一元りしげにとせうあらばの  
わやに花すと云ふ



四顆ねんう猪い  
ちう金をあ印  
の私印又六顆と  
猪い其の徐三原  
の刻し田山大工の  
刻うしとくもあ  
の四顆り印もまう  
つんうしとくも  
うことをひうじと  
教えこ事しきまゆいす接ひ入ることま  
○全金馬車のあらう出でうじとくもあ

田家に出でるをもあらぬ文鼎の門と  
高しすあしすと、一場

天保丁酉かまち寄

七九一宿主

とあきどりのましめく初めくい宿  
とせんじんの名の代うと同えのまると  
あきどりと年月を大ちしてかわる

七十七文文

宿口

お後に聯幅とささんとをよみ  
名をふりうよのうへ紙質すあう  
年月と日と年月と年月と年月と  
姓もえも、行な一場の所、枚あつとの  
もあくもえの所、所はそんは你  
とよきつてうとうあく、價えもゆ  
おげんと修業海ひ入んがあやくと  
いふ

り也み松井家の墨幅ニヨシ高うとあは  
う一場とねをちき一とタ額と書じき  
せこ能のと額と額と額と額の方と額  
あもと印すく。シテタ額の方

とお湯を飛毛印すよもと一箇難を有す  
ゆくが今あ例事ありうるども少く未す  
み谷をもあらへもしやれま代はせより友人  
ゆ也の筆と改めに機微すりて其の  
え所全くありそむこ意うる乃ち又勅  
の陽と陰の山谷も也と書ととせ  
す徳々つ人に富むもい夕顔の幅を以  
くくつとの山の所もんか東南の印す  
也と、印とぬじ刻、書手の印のいま  
じがうううううううう  
比と竹葉の呻子をキヌメテ極もも落  
心も軽くうううううううう

上頭ノ大小の口數ヲあゝ口ヲ寄せて吹く  
と氣と氣との間ヲうゞく接りして便べんとす  
下部ニ細と通すが孔ヲ人許多の細ヲ  
いとえんとち高ニ掲ケ一日因いんとんニ  
えんと細ヲとつて扱ハシマるのみと  
ヒ減ミる扱ハシマる四つノ一回ヲも果ハシマる  
烈ハシマき、すえハシマすと音ヲとめり、ニ、  
於ハシマし初ハシマし其先ヲひこ接ハシマす所以ハシマとえりと、こ  
市章ヲの物と既ハシマき、所以ハシマとえりと、こ  
の為ハシマす初ハシマしアリ不、序ハシマ將ハシマり、内ハシマい  
うもくの、唐ハシマれもうもくうもくうのとよも

されどこれ又詳り御申す所とあらず  
人情せんことをぞ承すとま  
○酒をすす家の事も物の事も簡づま  
義之丸も一と寫してあるべくのち簡めよ  
能手十手を考へ取てもあらぬことすくし  
云々と附録とあるが、その中でも多くは  
（この）ものと書かれてあるのであるが、  
考へて見るに、その間には必ずある  
かのうじてあるのであるが、その間には必ず  
あることであるが、その間には必ずある  
ことであるが、その間には必ずある  
ことであるが、その間には必ずある  
ことであるが、その間には必ずある  
ことであるが、その間には必ずある  
ことであるが、その間には必ずある  
ことであるが、その間には必ずある

ゆるの便りあああああああああああああ  
得てあえり

卷之三

○東近道の鐵橋をくわだれにまく  
うるを説く。乃は、まよひのいとこ  
ゆめりけん。まよひのいとこ  
金次汽車中、美女の車か今も  
この駅へまよひ了一男子えむる。の事  
男子あへあ勤もせせと占めど古近疾  
まくといふ。まよひのわゆしゆを守る  
よゆきす。女と別の間ももと聞得る。  
ひとと切り渡すあひてこそゆく。ゆくの  
停車所へ下車。まやとゆづけさんやう  
あくまでもくらべん眼とくらべてみやとす

素と拂ひとあらずまことに停む所も  
ゆへて車一にんかのりも寝とせず車  
一ゆく車と乗つてはるを続ひてお車が  
の行く所に追隨してまつてあかく爲  
きうえもえきゆもねうてくもそれ  
ば初めと野ものまもえ強き因し停車  
停車トリニテスル事にしの路もす  
えす齊く車の事の事とて右左に  
第一はわか一車との事の事の事の事の事  
刻の事に着てはるの事の事の事の事の事  
ヨニシウとの事と得より近のう車の  
ありやと聞ひ滅びて一人の差とす

ゆく、さと行ふと終る事ナヘ、定ムハ  
思ひ日生ニ所とすの事、私モソト現  
きえよ人考とせよと、跡しあど  
終てと消えを忽ちをの所里とす  
行ひ浦と暗里とひづ便きと云  
アヒト水の上に舟と乗つてアド  
アドト水と人すとども、アドト  
すと、草やよキを人浦とよ柔  
いがと、シテのを手と握つて、  
舟と水の面に手と手と入る、  
或トアドト水のと想ひて、人の男性の

猶以爲之名ニサムトありと出  
キ廻りてりんと食堂戸と排しも全不思ひよ  
リ前人すうシく注キテ了ニ更に考  
テテシ心と終のをあらへば人ニモ其の人  
モリと氣つをあはう様子とみゆめんが異  
て其人も睡覺や夢人ハアモリ恐うとせ  
ハシメテナニシテシテシテシテシテシテシ  
スの達人を教りゆかるへと至る國に先  
たう早々と同門のを學びシテシテシテシ  
心と氣ひと氣と氣と氣と氣と氣と氣と氣  
千にゆくと氣おのゆか化粧してシテシテシ  
時をもれずと氣と氣と氣と氣と氣と氣と氣

間ハ行方う續のゆゑとねむ受けひき出を  
クとまどとやキ、汽車の列ニ歩きしと汽  
車トテアズズベ此の事と氣と氣と氣と氣  
アズ先とと氣と氣と氣と氣と氣と氣と氣  
アズと氣と氣と氣と氣と氣と氣と氣と氣  
脇立一いわおーーーーーーーーーーーー  
二年半能む前、ニシテシテシテシテシテシ  
此方を力と氣けの多くうれしと氣と氣と氣  
課長向校改と氣と氣と氣と氣と氣と氣  
れや再令多うと氣と氣と氣と氣と氣と氣  
うんばと氣と氣と氣と氣と氣と氣と氣  
を施くと氣と氣と氣と氣と氣と氣と氣

席を熱ひし言ふ。諱と云ふ。至し

の五月十九日平山中に舟を過す皮え木車一個を刃  
で破り代り一尺幅代の物とぞ。蓋て人あ  
の凹凸有もの。又底あり凸凹あり。も  
形ももしかず。船後端をし。其出所を問へ。松  
平。船頭と曰つて。不味公も。皮繩のよ  
を。さうこれ。日家も少て。不。併て微  
び。地主。候。手津。船頭。仰。之。食指  
を。躊躇。仰。前途。えつと。北。船の名  
大。の。船。五。の。萬。の。船。に。屬。す。而。そ。る。  
て。船。と。改。と。す。い。と。、別。處。ち。名。し。山。昌  
出。ハ。船。を。將。す。ま。の。手。く。う。に。船。

### 大船の賣きと云ふ

○本良典のす簡きとぞ。得。う。良典。榜。左。右。内  
ガ。と。開。す。こ。あ。三。一。九。勘。モ。の。士。也。ち。簡。石。す。よ。め  
術。を。三。伴。と。お。の。大。戸。田。忠。故。の。す。簡。を。解  
ふ。即。今。禁。財。財。急。わ。や。：。貰。と。三。年。良。典。の  
ほ。と。左。の。み

### 小林良典

勤王家。す。京都。の。父。を。大。室。サ。貳。元。次。とい。世。鷹。司。家。の。諸。大  
夫。す。良。典。為。人。剛。邁。にして。武。事。を。好。む。安。政。の。始。め。正。四。位。下。に。叙  
し。民。部。權。大。輔。に。仕。じ。筑。前。守。と。兼。ね。常。に。其。主。を。輔。け。王。政。を。復  
古。せ。ん。と。欲。し。青。蓮。院。宮。及。び。近。衛。左。大。臣。三。條。内。大。臣。其。他。公。卿。の。門

に伺候し又日下部伊三次橋本左内等と大に尊攘の議を唱ふ當時鷹  
司太閤政通心と幕府に寄せ尊攘の議を阻止せんす良典痛く  
之を憂へ一夜機を得て之を苦諫し主公をして大に反省する所あら  
しめたる安政五年九月日下部橋本等捕ほゆるに及び良典も  
遂に捕ほれ江戸に送られ榎原氏の邸に幽せらる聖年八月官を褫  
ひ遠島の刑に處せられまだ配所に到らずして十一月十九日病て獄中  
化北す年五十二明治廿四年四月朝廷其忠志を追賞し特に正四位  
を贈る殉難錄鶴(大日本名辭書七版)

○中川得梅御名わち賤ニヨリ取リテ一毛  
と毛ニモニモ極きしも筋引くも極きしも  
より也此年をうつ所ゆテこと可くしうけひ  
て度セモクバツ人歎十ニ無んシレハコ  
アホニおぬし御沙由自死シテヒテノ相  
合多シ御沙由シテ御沙由のち間を一刻言セ  
んとおおきまく、言葉を多くあきそむくも  
石子トテ御沙由シテ二箇セカハヒ飯を御沙  
由スミテ御沙由シテニシテ御沙由のち間を一刻言  
義後の御沙由内家キ一ノ間をありんわを  
終シテ御沙由を裁断して御沙由  
終シテ御沙由を出でまること深希大

不思議のものを先づと呼んで此種の事  
をもととしと解釈する者こそは洋学者の像  
を模の姿だ。もととあるものとそのうりの處處、  
ち而改めがうとすらもせんこれをもととす  
る稀な事例である。細ちうし改とすとする處  
は寛政十二年春に於て改めて改義後  
法嗣より考案の御名居本姓の  
信得揚也とし源くとし得揚の居ちゆと  
聞すと得揚二十五年正月のえり改り改  
居すと推定する。今ある年の夏を有  
て五つと據入る。改是方をあらわす二

十五日也(五月二十日改焉)

山

二十一日記

○高麗本始憲の御内閣院式前り有族既滅々  
之勅遣ちる。私事のみ脱けず。其名號の子を前  
もと勅遣さん。而ま早大のことをかひ送り入る。其母  
片手をもと(但し)嘗て改めて左祖王の條件の  
えん童派の條件。すこしも事の如きの名號  
を乞ひ十年能く前り御内閣院式前り。運転を氣おもひて  
納れども。御内閣院式前りも傷く一人の御内閣  
リ此時こそと仰て詔をよ仰き勿論可也

此をも因るにかまひぬとお勤達しとしと  
地の一名の闇良と云ふて、これうなじゆ  
六朝月とほむまゐのひるをあつせん  
えきとてじゆくをまゆかみとちうびの  
八とこの院の御上御のてく所すし  
又々審りてはこゝをやと氣をひく  
すへかふとり難ちて執事たゞこと  
ちの書を用ひ、之の長を書き一て翌日  
宣示式に奉列する、してそめう、えも十  
年母の局の御漸くをとむら

○奥州の洲経型、草の一協と海の洲経  
の年号の後を平田・直しお書寫家

一里とせ、行ひんすまうえど、馬又へかの乗りに  
ひとぞ、行ひえず多く行き、ぬる書札をましむし  
麻の衣と、油の燈、一疋の境と見えよ。さう  
終に人氣を除す、とあくまで、高寿と高  
い段り、五年の時洲、服するものとす  
て、うむ。此男性的の、足疏を仰ぐまじ  
所洲の在り、出づる無、と、いひ、洲相家  
お盡と恐れ、鄭板橋、うり、洲相家  
さんと、うる眼と板橋に屬し、染の凡俗  
を考へし北は一長丈幅と刻んである。の  
内氣款す。其價と聞くハ多くとも、其位  
多くんちゆうの者不甚幸いとの歎

一月：猪の正月間にあけよとお祝いしむと  
○二月廿二日を御年正と仰ゆるといふと云ふ。也  
に猪ひつとそりうくの薄方腰もとある  
十三黄帝内經たまむ新令本十餘冊す  
零奉うむもさうと稀覯。のせたがゆき  
四花車を北ちと往來年僅とよ一冊あり  
さんじうと申ゆる家とちと上段しむ不  
どうれせやあとぬち家唯用六と仰ゆるを  
かうもとめのうす車内御身より未一泡と仰  
とそきく跡と云しきはんと西史傳典  
海經等と申す。管子夏以毛根料也此  
えうこころも考集す。えも七八分夕既

之腰す漏れし秋奉申既にとて家のお祝いが  
つき往々のむ活と申す二三意見と申すとある  
此の海經等と申す海經の行紀と云ふと云  
り也。えもと云ふ平山坐をゆふ等と云  
れ多とあえども、内政多しのニモ一  
組御の社のとすも、おきゆる事も申す  
るよりも其頃を申すもの化のとて文晁の  
父元旦うよーと申す海經と申す経本拂ぬ  
ゆゆり真と申す羊の内きのぬある鹿角と  
高と云ふの羊をあへしむと申す  
と歎する文晁の家の本姓を時と乞へえ且

油絵重と初生と不まことに改へ  
へる。油路里の方に立す。りそこのある  
を元さんもよろこびあつた。化け佛  
と称名寺常勝寺錦鏡堂の松年二寺  
の外に重と不思ひも見え。太鼓一と鐘  
御名寺鐘鏡堂市内東北迷庵の薬局  
とし其の三面皆印。持てて二本せうち木行者  
の花本也

○七月廿二日ちゆまむらの金を出し。諸事  
おどとす。板のキモリをくへてもやのあは  
る。済みぬ。やうやくも。ゆき。うらは。御作をも  
せ。一社の本堂を再建。有りやがて。かに。行

(一)これと代へ。徳川二ノ口。一無事。終  
れ。まことに。行。の。所。を。し。め。し。得。さ。  
失。て。之。十五。歳。の。行。使。と。生。じ。本。山。の。御。寺  
七。歳。と。之。色。と。捕。め。に。入。る。事。多。あ。る。行。使。の  
行。色。と。之。行。と。之。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
本。山。の。御。寺。と。之。の。お。母。と。し。わ。う。と。之。の  
御。次。と。お。母。と。之。の。御。次。大。い。の。行  
の。御。修。と。初。と。耳。と。と。所。と。と。之。年。一。と  
佛。と。之。の。御。寺。と。之。の。御。次。大。い。の。行  
の。御。修。と。初。と。耳。と。と。所。と。と。之。年。一。と  
千。と。油。と。之。の。御。寺。と。之。の。御。次。大。い。の。行  
の。御。修。と。初。と。耳。と。と。所。と。と。之。年。一。と

約三十萬圓を弟も二百四十圓を落札の  
如く仕事へ之れを代へ渡ることにて  
スリ高倉と生瀬につけ此岸木舟打オハシ派  
はるかに雪の雪も大作、生瀬と後しはる  
さん海と立派、と往々すべきやうにまじめ  
船と船と立候の義一と記さしをんせし  
も荷物と泥引けつて荷物と余と記せしを  
モド出しまでゆえ、さん高倉とし余と記  
留よこゝに高倉、奥方と居ておまづきあ  
くさんとホーリー此岸木舟打の半船圓と御さんと  
くるまゆり人多きめりよ之れを送るの不得  
来まことにやくあらのハトイシナシ社もよこて

衝あるも可らずと笑ひ、ちゆと見ええふ早橋  
ゆのあめと北野とテヘ入ることと乗せんと  
て細田に渡つてもあがゆい坂道と被りて  
○七月木舟と高倉のまねに御り花煙と接はれ  
而洋菴花の花と下す。植木屋と役しはるの  
弓高が二葉の井と稱す者のかたにナスナ  
ロモ植レ一あ、松樹のトコアシクシキもと  
えリ除キ、尤幸より六つ合を植め、松のミドリ  
見こえり終る、夜の一月の松林の眺望を遙め  
木舟長方形のまねのゆめ松可立と海

ふ個やうよ之かと併のありと用ひともの  
スレく解とよこしがせに一層人をもんと  
人參の龍とほくとすまよとことく用ひ  
ふううくんとゆくわす、北至と南人の差  
コモロアベキの係（相手の方とも元  
つに似る）（口上）

○四月下旬今より、申す前二月に本業に  
おきて成る評を、於て販賣新々たり往々  
此岸洋鏡をと便り、金多々へ従事とす。一物  
の洋鏡をある事あらきよ、べきこととのうえ  
まんとすむ仕のうを教訓：うるさい、一個未だと  
物：えども、口説して其の末にさを余り行ひ

東樓原泰

り。高田學長市島前理事を始め教職員及び高  
等豫科學生堂に満つ。  
贈て高等豫科長安部磯雄氏

先づ嚮に故田原高等豫科長の功勞を表彰せ  
んため、本校に於いて其の肖像額面を作製  
すること、なりたる、その肖像が今回出来  
上りたるに就き、茲に其の追悼會を開催す  
ること、なりたる旨を宣し、且つこれより  
其の除幕を行ふに就き、一同起立敬禮せん  
ことを望む旨を告げ、

逝せられたるは  
更に故先生のたる者自奮自励  
あるあらん、希望  
らん

と結び、次に前仰  
諸君、田原君の御  
昨年押詰りまし

早稻田學報（大正四年五月）

であります。實は此田原君の家庭の状態と云  
ふものは、私は最もよく承知して居る譯でありま  
するが、横濱に於きまして、火災の爲めに田原君  
の財産と云ふものは、一夕の間に皆烏有に歸し  
た。殆んど着の身、着の儘で逃げられたと云ふ位  
な有様であるのである。爾來田原君の家庭に於き  
ましては、財産などと云ふものは何もない。併な  
がら、何もないが他より以上の財産があると云ふ  
のは、即ち先刻私が御吹聴申上げました四人の御  
令息、財産である。田原君は他の財産は欲くな  
り。

と述べ終りて、憤惜悲痛措く能はざるもの、如し  
次に學長高田早苗氏

餘年前と云ふ昔話であります。其時  
の或る宿屋へ泊つた所が、そこで菓子を感  
じ出た。それを見てモース先生が之は  
いものだと言つた。所が、宿屋の娘さん、  
出て居て、之れは新しいものです。イヤ  
いふに思ふ。加ふるに、近來少し身體が悪く、殊  
に今日は氣候が悪いので多少心持も好くないの  
でありますから、簡単に一場の御話をして御免を  
蒙らう。昨年の四月十二日に此東京を立つて、

歐米漫遊の金に上りまして、田原君の御令息  
の事は、勿論、御心配いたしません。

# 物語のじゆくとそのまゝのまゝと

り。高田學長市島前理事を始め教職員及び高等豫科學生堂に滿つ。

龜<sup>カメ</sup>て高等豫科長安部磯雄氏

先づ嚮に故田原高等豫科長の功勞を表彰せんため、本校に於いて其の肖像額面を作製すること、なりたる、その肖像が今回出来上りたるに就き、茲に其の追悼會を開催すること、なりたる旨を宣し、且つこれより其の除幕を行ふに就き、一同起立敬禮せんことを望む旨を告げ、

正面高く掲げられたる肖像額面を蔽ひたる白布を取除かるゝや、一同起立敬禮を施すと共に之を仰視すれば、端嚴なる田原科長の肖像生けるが如し。安部科長更に……

故田原科長の人と爲り勤厳にしてしかも寛大の徳を備へ、人に接するに親切を以てす、其の校務を視るやオソリチーに居らずして、常に虛心坦懐衆の言を容るゝの雅量あり。眞に欽仰すべき教育家の人格たりしことを説きて、悼惜の意を述べられ、次に高等豫科學生總代大竹健作氏、柔道部總代達藤盛彌氏、青年正義會總代松枝德磨氏順次弔文を朗讀し、次に校友代議士早速整爾氏

冒頭先づ自分の校友としての關係以外、同郷の縁に因りて門下生たる特別關係を以て親しく田原先生の恩顧を受けたる者なることを説きたる後ち、勤嚴、方正、實意、眞面目等の言葉真に以て其の人格性質を説明するに足ると断じて、平素の言動を詳悉し、尙ほ研究心の深く且つ堅く堅忍不拔の概ありしに、不幸過度の勉強害を爲し、研究の大成を見ずして恨みを九泉に齎して遠

逝せられたるは悼惜の至りに堪へずと慨む

更に故先生の教を受けたる吾等後輩門下生

たる者自奮自勵以て將來の向上進修に努むるあらん、希くは故先生の徳に報ゆる道たん

と結び、次に前理事市島謙吉氏

諸君、田原君の御肖像を作りますに就きまして、類

昨年押詰りましに時分に、或人が參りまして、類

居るやうな譯でありますと、復た重ねて私の憂を

たことを實は昨今の如く考へて居りましたのに、

指を屈して見ますれば、最早半年以上も経過して

居るやうな譯でありますと、此追悼會に臨みまし

て、當時を追憶致しますと、復た重ねて私の憂を

深くする次第でありますと、唯今諸君に向つて、

何等かの御話したいと存じますのであります

が、いつも私は此友人の追悼の會などに臨みまし

て、當時を追憶致しますと、復た重ねて私の憂を

申上げることも前後致しますのが例であります

するが、別して此友人の既往を語ると云ふこ

とに付きましては、い

つも其混雜を來しまし

て、殆んど話になりま

せぬと云ふのが私の例

である。田原君の御葬

式の場合は私も友人を

代表しまして、弔辭を

読みました時なども、

殆んどどう讀んだり分

りませぬやうなこと

で、殆んど我を知りま

せぬと云ふやうな態狀

でございましたので、

今日又何等かのことを申上げますに付ても、何を

申して宜いやら甚だ惑ふのであります。

一體私と田原君との間柄は、非常に久しいので、

居りませぬ譯でありますと、今日久振りに學校へ

出て参りまして、其出來上りました額を此所で拜

見なすると云ふやうなことでありますか、今日

御出席になつて居ります田原君の未亡人に對

しましても、久しう御無沙汰を致して、居ること

を先刻も御詫をした位なことでございまして、殆

んど一月以來、選舉と云ふことの爲めに忙殺せら

れまして、隨つて田原君の御亡くなりになりました

中にもありました下瀬雅允君、之れは私共は後に

東京高等



故田原科長肖像面寫眞

りに私に交渉を致しましたが、其の後いろ／＼な難事の爲めに其の出來上りましたことを存じて居りませぬ譯でありますと、今日久振りに學校へ出て参りまして、其出來上りました額を此所で拜見なすると云ふやうなことでありますか、今日御出席になつて居ります田原君の未亡人に對しましても、久しう御無沙汰を致して、居ることを先刻も御詫をした位なことでございまして、殆んど一月以來、選舉と云ふことの爲めに忙殺せら  
れまして、隨つて田原君の御亡くなりになりました中にもありました下瀬雅允君、之れは私共は後に

角此肖像を拜しまして、田原君の心事に多少立入つて見ると云ふことも、亦故人に對して然かるべきことでないかと云ふことに觸れましたと、故人に對して無禮なやうなことにも當るかも知れぬのであります。或は斯様なことに觸れましたと、故人に對して無禮なやうなことにも當るかも知れぬのであります。併ながら友人なる私が、空々しく唯誰でも知つて居るやうなことはかりを述べましたのは、恐らく地下に居られる、田原君は餘り御満足ではないか知らぬと思ふ。であるから、寧ろ之れは田原君の心事に立入つた、殆んど田原君が言はんと欲すること、言はんと欲して言はれないことに觸れて見てはどうであらうかと考へたのでありますて、何だか斯く申すと、甚だむづかしい事のやうでざこいまするが、併ながら申して見ると格別むづかしいことではない。

一體申す迄もなく、田原君は頗る謹直な方でありますて、自分の意中にあることは、大抵の人ならばバツバと言ひます事柄をも、なか／＼言はれぬ人である。殊に自分の長所或は誇るべきことなどに付きましては、頗る抑へて申されぬ人でありますて、田原君の心事に付きましては、餘程深く交はり居りました者でないと存じませぬ事も多いやうに思ふのであります。そこで、私が田原君の心の底を叩いて、諸君に對して御話をすると云ふことも、徒らに唯其心事を暴露して快とする譯ではございませぬので、之れが教訓になると信じて申すのであります。之れを語つて其背槻に當るが當らぬかは分りませぬが、若し背槻に當つたとしますれば、故人も必らず微笑を含んで喜ばれる、とてあらうかと思ふのであります。夫れはどんな事であるかと申すと、私は田原君の生涯の恨事は何にあるか、即ち生涯の恨みとして居られたことは、何であるかと云ふことを申したいと申ふのであります。田原君の終生の恨みとして居られたことは、何にあるか、即ち一生涯の恨みとして居られたことは、何であるかと云へば、先生は一口に申すと、是日ヒニ附しまして、深き希望し

地方に歸つてから、中學校の先生をして居られたと思ひます。が、本校が出來ました時に、君は郷里から迎へられて、此學校の衝に當られたと云ふことは、此學校の歴史に残つて居ることでありますから、今更繰返す必要もありませぬが、其際に於きまして、丁度先刻早速君が御述べになりました所へ移るのであります。が、今の丁度牛込區役所のあの附近の簞笥町と申す所の一角に、小さな格子戸の立つた家があつた。今日は未亡人も御出席でありますから、定めて追憶の御感があらうと思ひまするが、あすこに故人が住居せられました。其時分は、即ち此學校の振ひませぬ、極めて難澁な時代であります。君はあすこから學校へ通つて居られたのであります。が、其學校へ通はれました後の仕事と云ふものは、先刻早速君の述べられました如く、研究であつたのであります。私の考へまするに、此研究時代と云ふものは、君には最も大切な時であります。幾多の發明は皆其時代になつたのであります。漆の發明と一口に言へば簡單のやうでありますが、私も嘗て故人の爲に説明書などを書いた覚えがありますが、特許を得て居られる種々なるものが出來まして、殆んど二十何種と數へる程であつたと自分は記憶して居る。斯様に種々の工風をされましたが、固より之は簞笥町時代に起りました丈けであります。其發明の爲めには、今日茲に御出席になつて居る未亡人などの御話に依りますると、焜爐の火をおこす或は其發明品の薬剤に觸れると云ふやうなど、手に火傷をした。後にはそれが糜爛するに至つたと云ふやうな酷いことも起つた。御宅へ飛出しても、故先生の未亡人に御目に掛つて見まするゝ頭は始終灰だらけと云ふやうな斯様な状態がよく續きました。斯様に非常な勤勉努力をせられました。が、私から見ますると、帝國十

This image shows a single, horizontal page of aged, cream-colored paper. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and small dark spots, characteristic of old paper. A dark, solid binding strip runs horizontally across the bottom edge of the page, obscuring the bottom portion. The rest of the page is blank and white.

此學校もなか／＼大きな規模になりました、高等豫科長として先生を迎へられたのであります。それから、爾後育英の爲に盡されましたことは、私も多數なる所の學徒を卒ぬられて、始終それに向つて勤勉努力、學校にどれだけの功を盡されたかと云ふやうなことに付きましては、今更申す迄もない。之れ程著名な事實はありませんが、尙ほ其外に、之れも私が先刻申上げましたことは接續することであります。此高等豫科を卒ぬて居られまする其傍らに、君は相變らず研究をやられて居る。研究をやられたが、さて之れは誰も知らぬのである。君は嘗て人に向つて其事を言はれない。私の如き殆んど日夕互に往來しました者さへも之れを知らなかつたことは、實に長いことでありまして、嘗て或時に、君は此頃何をして居らるゝと聞きました時、私は近頃斯う云ふものを讀んで居ると云ふ話を聞いた。所でそれは何時頃から始めて居るかと云ふと、三年も前から始めて居ると云ふのでありますから、其研究の深さと云ふものは、勿論推測ることの出來ることであつて、な／＼深く研究致して居られたのである。そこで、復た其後に先生が更に大なる研究を始められたと云ふことに付きましては、之れ又私の少しも存じませんで、せ／＼られました時に始めて聞いて驚いたのである。君の宅へ行つて見ますと、私共嘗て知らないラボラトリ一が出来て居りまして夫れに日々閉籠つて、コツ／＼研究して居られたと云ふことを未亡人や令息から承はつたのであります。君は師として仰ぐ者がないと云ふ點から致しまして、又師を求めるに云ふことが不便であると云ふ所から致しまして、近頃西洋で頻りにやつて居りまする通信教授、此方法に依つて、君は頻りに答案を作つては西洋へ送つて其批評を求め、之れが殆んど段せらるゝ時に迄至つて、君は頻りに答案を作つては西洋へ送つて其批評を求めるにあります。君は師として仰ぐ者がないと云ふが帝國大學を抜けな／＼たと云ふことを一生の遺憾とせられて、是非共帝國大學へ自分の小供を入れて卒業させなければならぬと云ふことを心に固く誓つて居られたと見えます。即ち第一第二第三の令息共に、皆此帝國大學へ入れると云ふことの豫定になつて居りまする譯で、君は平生私に

心の底を叩いて、諸君に對して御話をすると云ふこと、徒らに唯其心事を暴露して快とする譯ではございませぬので、之れが教訓になると信じて申すのであります。それを語つて其背槻に當るか當らぬかは分りませぬが、若し背槻に當つたとしますれば、故人も必らず微笑を含んで喜ばれるごとであらうかと思ふのであります。夫れはどんな事であるかと申すと、私は田原君の一生涯の恨事は何にあるか、即ち一生涯の恨みとして居られたことは何であるかと云ふことを申したいと思ふのであります。田原君の終生の恨みとして居られたことは、何であるかと云へば、先生は一口に申しますると、塾問上二問しまして、采き希望と

原君の學問に於ての一の不幸と私が申す所以であります。君が終生忘れられない所の恨みと申しましたのは、即ち之れであるのであります。君は、折に觸れて我々に申されたこともあります。併し、謹抑の人決して多くを語らぬ譯であります。君共徒らに其意中を推測つて居りました位であります。いつもく痛切に、私共此點に付いて同情を寄せて居つたのであります。君は此帝國大學を卒業するに至らざりしと云ふことを餘程強く考へられて居つた譯であります。これから追々申上げまするが、之れを以て殆んど大なる恥辱と考へられて、一生涯の内に、何等かの方法を以て之れを償ふにあらざれば

向つて言はれるに、俺が帝國大學を卒業するに至らなかつたから、せめては自分の小供をして帝國大學を卒業せしめなければ止まぬと云ふことと言つて居られた。これらを考へて見ますると、君の一生涯の恨事と云ふものは、當時青雲に志す者の登龍門であつた帝國大學を卒業し得なかつたと云ふことが何處迄も付いて廻り、其深さと二ふものが實に案外深いものであると云ふことに驚かざるを得ぬので、實に之れは敬服すべき點であると思ふのであります。

私は田原君に向つて、實に同情に堪へませぬけれども、斯様な事が動機となつて、始終自奮力を發揮せられて研究を積まれた其學問の度合と云ふものは、少なくとも博士以上の者があるのであります。君の教育上に注がれた力と云ふ者は、更世の中に立つて居られる多數の博士以上のものであると云ふことは言ふ迄もないと思ひますが、先生は殆んど死に瀕する迄も、自から少し満足して居られぬのである。尙ほ年を懼きく而して研究に研究を積んだ上に其研究の結果世の中に表はして、自分の抱負自分の志を一度は世の中に發揚することも期して居られた譯でありますのに、事のそこ迄に至らぬ内に亡くなられたと云ふことに付きましては、諸君と共に私は田原君の爲に嘆かざるを得ぬ次第であります。博士と云ふが如きは人爲の學位でありますから、田原君を輕重するには足らぬ。田原君は恐らく斯様なものを得たいとは決してつて居られなかつたでありませうが、私共友人の私情から言ひますと、先生が縦し欲せなくとも、之れ丈けは無理にも與へて、而して先生の多年研究せられたことに報ひたいものであると二ふことを私共は、内心實に希望に堪へなかつたのであります。斯様な事柄を田原君に言ひました所で、あの謹抑な人がそんなことを聽く譯もありま

が多い。發明家兼事業家と云ふものは餘りない譯であります。田原君も全く其通りであつたのであります。若し此事業の爲めに注がれました君の心血と云ふものをして、之れを學術の方に注がれましたならば、それは非常な研究を積まれて、君は實に非常な大學者、世の中に有數の事蹟を残されたに相違ないと思ひます。誤まつて此事業の方に身を投げられることになりましたのは、返す／＼も殘念の事に思ふのであります。而して、其事業と云ふものが一段落を告げまして、又學校に復歸された譯であります。其復歸されました後のことは、諸君も略々御承知である。丁度先判安部君の御述べになりました所に接壤する等で

と述べ終りて悼惜悲痛措く能はざるも、如し  
次に學長高田早苗氏

れた頃、私共が帝國大學即ち東京大學を卒業する前後と云ふものは、其學校が日本に於ける唯一の大學生である。其時分は早稻田大學は無し。慶應義塾はあつたが慶應大學は無い。慶應義塾はあつた所で變則の教育をするに過ぎない。それで、此唯一大の東京大學を卒業するか、しないかと云ふことは將來の運命の岐れ目である。登龍門を登れるか登れないかと云ふ譯である。所が、田原君は途中で脳病になつて、最も有望なる秀才が到頭卒業が出來なかつたと云ふことである。其時に思ひ込んだことを、田原君は一生涯痛切に感じた。一體田原君は一本氣の人であります。一本氣の人ですから、終ひまで其事を思詰めて居たらうと思ふ。市島君は學校方面の話を私がするだらうと言はれたが無論少しばかりします積りであります。餘り長くては、却つて諸君の御迷惑にもならうから、簡単に御話する。すれば幾らでもある。實に思ひ出の多い話は數限りなくあるのであります。丁度今から三十年前であります。其時に始めて東京專門學校が出來た。其時の學校は向ふの文科の教場の而かも半分しかなかつた。其時分の東京專門學校は、あの文科教室と書いてある所の半分であつたのであります。開校當時から我々は先生である。私共は帝國大學卒業生、文學士高田早苗と云ふなまく、威張つたものである。其時田原君は、我々と違つた方面から來た。前に御話した通り、大學へは同じ時に這入つたが、卒業が出來なかつた。田舎へ往つて、先生になつてしまつた。所が、此東京專門學校の始めての校長の大隈英麿君が、誰から田原君と云ふ秀才のあることを聞かれたのでせう。直に招かれてやつて来て、そこで、我々は始めて田原君も矢張り此所の先生になるのだと云ふことを知つた譯である。それから始めての學生を募集した時に、私と田原君が一緒に試験委員をやりました。其翌

如因坎水之行而用之也。久之能以水土之  
人也。其一多水人也。水人也。

人である。自分の小供さへ安くすれば夫れが財産だと思つて居られたのである。又之れ程宜い財産はないのである。田原君として嘗て誇られことはないが、確に誇つて宜い財産を持つて居られる。令嗣は今や帝國大學を卒業し掛つて居る。其他の御小供達も悉く帝國大學を卒業さして見せると云ふ其希望の通りになりつゝあるのでありますから、之れほど宜い財産はない譯であります。令嗣令息達は、斯様な撫育を受けられた譯であるから、勿論私が申す迄もないことでありますか、必らず故大人の教を服膺せられまして、之れからは益々御奮勵にならなければならぬと思ひます。又令嗣令息と殆んど同様の關係にあられる諸君に於きましても、同様のことであらうと考へまするやうな譯でありますて、唯私は故人に對する所感を申したのでありますて、いろいろ勝手なことを申して御無禮になつたか知れませぬが、併ながら、友人の友誼と云ふものは斯様なものであると云ふことを故人も御察し下さらうと思ふ。徒らに友人の美點ばかりをさらけ出して、少しも其缺點を言はぬと云ふが如きは、これは友人として何だか心に濟まぬ譯であります。私の如き露骨の性質、殊に謹しみと云ふことを有しませぬ者はいろいろの點に於て失禮でありますと思ひますが、其點は田原君の靈に對して御詫を致し、又諸君に甚だ繩まらぬことを申上げましたとを謝します。

人であつた。而して漫遊中に屢々田原君の所へ書を寄せまして、原君からも亦屢々書を寄せられたさうであります。所が、妙なことで、届先の書方が違つた爲めに、一本も私の手許へ達しない。歸つて来て、其手紙を始めて開いて見たやうな譯であります。さう云ふことも即ち長く遇うことの出來なくなる前徵であつたとも言へませうか、而して亞米利加へ最後に行きまして、ドクトル・エドワート・モースと云ふ一個の年老いたるサイエンティストに遭ひました。之れは私共學生の時分に、田原君と同じ學生であつた時分に、日本へ來られた。今でも有名な動物學者であります。其當時から、名高い動物學者である。始めて日本に進化論、ダルワインの説を擱めた人であります。其老人にボストンに於て遇ひまして、いろいろ田原君の噂を其老先生と共にしました。此人は、餘程田原君には縁の深い人であります。私は其モースと云ふ人といろ／＼冗談を言つたので、あなたは進化論を日本へ輸入してボタレー陶磁器)を日本から輸入した人だと言つて笑つたのであります。即ち日本に居られる時分、陶器の研究を傍らやつた。西洋人で陶器の研究をされた第一の人である。全國を廻つて、いろ／＼な陶器を集め歩いたものだ。其時に學生たる田原君がモース先生に付いてゐる。餘程古い話で、三十

た菓子が古いと言はれたのだと思つて、笑をしたと云ふ話をモース先生から聞其話は嘗て田原君に昔し聞いた話である節を合すが如くて、其事で急に田原君を出しまして、繪はがきを出した。其時分最早病つて居られたのだが、自分は少つない。跡で聞くと、其手紙の届かぬ内にられた。

桑港へ来ますと、始めて私の妻からの手原君が大分悪いと云ふことを知つた。そに乘りまして、あすこに居る橋君と田原しつゝ、どうしたらうと心配をしつゝ、來洋を船に乗つて居る間ぢれつたくて堪こ度日本へ着く三日か四日前、此所から無届くと云ふことを船長が言つて呉れました。そこで、無線電信で田原君は生きて居るた。所が、もう死んでしまつたと云ふ返中へ來た。そこで始めて、此私の舊親しいく友達が死んだことを承である。實に感慨無量、何と云ふ言葉もありました。

唯今、市島君から、即ち矢張り舊き友垣ありますか、段々田原君の事に付いて御た。一々其通りである。全く田原君の塾

と侍ひまつねが都へ揚駕せんと  
ゆきえんとこへおめおへこへす  
○ま振るを山へ口産うるの茶入へ全輪  
寺とてあらまくらむれとろせん  
い貨りててんと支那じと納豆と入る  
う地此ひきうちれと摸りとよひと全  
山寺佛堂とてあらむ後移に至る輪寺納  
豆とてよ所ひきれ此れちとてへ  
日前日平山や、とてあら御殿、のうち二生と  
えすとてあら御殿、のうち二生と  
先节、ちいれへ  
乞ふまづあらまつねへ筆路経拂へ

度ある事無事と云ふ事おやう  
い事もあつてゐる。あつては年老ひてもまだ手本  
のうのまじめにひきこもる事多くての間をと出で  
鳴ふ事多のようひまつて、あひやうとまうう  
立たぬと吹へる。右内文またまむかは満さ  
け、あらう。まことに或うもすいがる事あつて、う  
す、さんざん御縫糸のえどとのとく減  
り、かわりて、おうじゆうのうとく縫の方  
ちく外縫の技術の高下に拘らうと実意  
をも重視した事から、塘の二眼看歎も  
はづ。最も極めてうよのとくである。

○サキ亡き正山西も初子湯島日本傳愚河家の  
遺聞也本多・吉村二つの事と堅もまづひ投  
宿の高木ねえこれ。口金、今昔のやう  
を生れ事、もとより正山家、絶句も深いとえのこ  
とを説くとほくことううと、此説皆、既てち  
ずく。憶亦の哉、何ぞ中が此の其事乎をえんこ  
う比正山の後、一〇月を経て、四十一の厄年のひあつ  
て三九〇し二十一年、ひどくひきこもる事、夜半不  
かべ六十二才又不満三十歳、前ひるの骨の  
正山、嫁へての事、三十歳前ひるの骨の  
正山、嫁へての事、三十歳前ひるの骨の  
正山、嫁へての事、三十歳前ひるの骨の

あつれことうきとゆひ出し誠多ありむらひの國  
山内家多先の平し西丁多ありのことを覺へ  
て元子院殿又は白の庭下にて御手綱をもひる  
無いをぞえくま自方とえまとおあ(あ)りと  
裁(さ)し、並は山の御前とお後人(うしろと)  
へと主とれども御心うきうきゆゆゆと云ひれ  
ふとおしに山の事務すと前にも泥下こと  
里本格(こじき)ちうて山をあめらしく山内(さんない)をね  
男(おとこ)あつれひむ地(じ)のせうね、山をういて  
く西(にし)を遠(とほ)かの、山をせんと其後房(ぼう)より赤津  
とくま家の名(な)みうとうじともあまぬだよ  
ス海(うみ)在リ、と山地(さんぢ)ひぬ事(こと)もあがひ

まのの流(なが)れを、あとさうと見(み)て得(とく)のつと厚(あつ)  
り善(よ)き家(いえ)の、ゆきすすめ家政(いえせい)を振(ふり)て元  
で、あ山(あさん)をえう、と、逸(いつ)を日(ひ)やつて家政(いえせい)と助(たす)  
けの色(いろ)と得(とく)ううにこともあつて、ひむと今  
るの時(とき)とゆき、帝(てう)と、承(うけ)て、御(ご)縁(えん)を、引(ひ)き  
つと、もと本(もと)の別(べつ)花(はな)を、其(その)まにゆき、移(うつ)すこ  
と、と、と五(ご)ひえはましと、自(じ)ゆく成(な)り、主(ぬし)つて、ひ  
びき、ひと山(さん)と、恩(おん)を全(ぜん)くゆき、と、良(よ)い  
別(べつ)えんすみの教育(きょういく)と、二千年(じっせんねん)を、身(み)と、  
片(かた)つき、えねねこ、羽(は)子(こ)の、紅(べに)いと、まみと、其(その)を  
こひとさう、と、すうと、日(ひ)付(づ)き林(はやし)

ううと、自分の肩上の荷物をシナ先に亡  
えり家のあり湯屋の廢忘をもーと、あち大  
浴湯次主井向印碌前まです

○松浦重利の知しは、空きよもと清ひる  
俗の様にゆび、成尼の隣は江戸の市やう拂拂  
さんじゆえに市民をめぐらせるやと考へてこ  
とう氣つゝ事、又下層地からとめう仕事  
へきや、動氣のあくびも難しことまことか  
の仕事もあくびの流石に筋角の活字もある  
考へて見る

松浦の一體我よりもうと力を入れ

あひつせることによく聞こおし仰おひやあ  
たひに千枚ともう生じて、其んも成尼の隣の  
江戸仕事の手札などといはゆる、聞るをえども  
手札をえども詔書大夫侍商人藏あらへ  
もむれい社令の各階級の名目の記でん  
をうゆく其の下の一木の丸平縫と引いて  
世のヤジ役をのほるよのかく以上の階級を  
餘りし心配をひかずおまへ、抜きもあきよ  
即ち不脇のものなりぬまく困るが、職もや  
船頭や丸へもと名にすまふもすまふ  
柳えふふせくまく其方をもあまき、そこ  
が余りもくろへば、自分ひあの方をと

かでしておひこと一に後まうじめです  
おまつしり、うらのとうわゆへくれ  
のとひきよおみへひのい、おゆのむかや  
おねがい、吉奈方面の親方も頼んで、ま  
とあを房秋、ますまたハセイ、房ねじらう  
からせつて、まくまと、えつこもすす  
おおゆの新やうな洋子と、彼草を植め  
しまいと、せううちもかのせ、また、せん  
まう親方うりうあらとつね物をすふよう  
あるハ金と常、おのの腰に以て彼草と  
せこひすーとあるあ、うつてあると、  
さう手常ううーに、うりうへ、目を注げ

主ううひと今は流まうてゆくやうによ第一  
の海、猿根へること、出来て、ま見え給くと  
おとえん  
泊とくらむ様に佛殿の脇の大きさは  
哉して、そこ、曳店の隣江戸の市中、うる  
おとえんと人民と仰と一い、か、外に  
仕方ううい、聞か、かの寺々を砌へて、  
人民と仰ゆておみと、櫻家の寺門と  
仰へて、いを支へやせやうと、れ、ゆくと、  
ところがえかみ出来て、成る祀佛殿の勢  
力と、廣大なるものであることを深く感

○友人志賀重昂地を攻め、アーヴィングを敗ひる。米四テキサス獨立の史と後、アラモ初役に於て主ゆドレーヴィングにて即ち殉りシボナム、重因を脱し、外に援軍ともいひ事なくボナム、重因役ニ鳥居強右衛門、國を脱し、後金、日第ニ殉リシと東西勝負を争ふ事、其義理の故と甚しお似り思ひあり。遠取り、政味をもつて民も民もしく石を鳥居つねにし而す自ううがと牴し、刻セしもんとテキサス州サンアントニオス、於ケアラモ寺の大破壊に達イタリ。北リおもろき事、山を改へ、アーヴィングの陣をそりそれあらわすも、志賀氏の奇策也。

# アラモの戦

## 注意

(鳥居強右衛門が家康公に長篠の危急を告げたる處)にアラモの記念を掲げ、

▲テクサス國サン・アントニオ町アラモ寺　主將　奥平九八郎貞昌(後、信昌)　齢二十二歳。

▲テクサス軍小勢なれば、ケンタッキー州のデーヴィッド・クロウケット、南カロリナへ來る。

△長篠軍小勢なれば、參州五井の松平彌九郎景忠、同竹谷の松平又七郎家忠、

主將トレーヴィス・アラモ寺の頂に上り「目標」  
櫻林の左に現はれたる敵一千一百呪  
狙へ撃テ。ズドーン。  
『撃方止メ』。

寺員より下り、トレーヴィス、一司二句引

主將トレーヴィス・アラモ寺の頂に上り「目標」  
自由及び獨立の爲めに奮戦して米合衆國を創  
造したる華盛頓將軍の第一百四年の誕生日なり、此の吉日に恰も開戦せこそ何かの天啓  
と云ふべけれ、イデ諸君テクサスの自由の爲  
め蜀立の爲り累々決戦せつて、冬りと。總  
も人數

とを伍  
副將バ  
四人、  
に人數

甚よ乍

# アラモの戦

宝の書  
注意  
大正四年四月十六、十七、十八日、愛知縣岡崎町に於て家康忠勝兩公三百年祭舉行の際、岡崎舊城の石垣（鳥居強右衛門が家康公に長篠の危急を告げたる處）にアラモノの記念を掲げ、以て東西意氣の契合を示す

▲テクサス國サン・アントニオ町アラモ寺　主將　ヴィリアム・バーレット・トレーヴィス　齡二十五歲。  
△日本參州設樂郡長篠城　主將　奥平九八郎貞昌(後、信昌)　齡二十一歲。

▲テクサス軍小勢なれば、ケンタッキー州のデトウェイード・クロウケット、南カロライナ州のボナム、援兵、

△長篠軍小勢なれば、參州五井の松平彌九郎景忠、同竹谷の松平又七郎家忠、援兵として來る。

▲アラモは義徒一百五十人、援兵三十二人、合計一百八十二人、墨西哥<sup>メキシコ</sup>の大統領サンタ・アンナ自から率ゐる五千の敵軍に圍まる、即ち二十七倍の敵。

△長篠は奥平勢五百餘人、兩松平の援兵三百餘人、合計八百餘人、甲州の大將武田勝賴自から率ゐる一万一千の敵軍に圍まる、即ち二十七倍の敵。

▲アラモ糧食弾薬缺乏するや、十重<sup>と</sup>二十重<sup>は</sup>の圍を脱して援軍を外に乞ひ、復命（事實上の）の後、節に砲

△長篠糧食彈薬缺乏するや、十重二十重の圍を脱して援軍を外に乞ひ、復命（事實上の）の後、節に殉じたるは鳥居強右衛門。

アラモは米國の長篠なり、長篠は日本のアラモなり、長篠の戦の壯烈を知る者、アラモの戦を知らざるべからず。

主將トレーヴィス、アラモ寺の頂に上り『目

標 榛林の左に現はれたる敵

一千一百呎

狙へ撃テ。ズドーン。

『撃方止メ』。

至下に翻へり 兵に會つた、馬上優に、鷹揚と『クイダード』

も致さず將

殿に於かせ

心氣の爲め

も早く御

する二回、サン・アントニオ川より三哩

Prof. Shigetaka Sa

遠南霽雲 貞風于今吹芳琴

西俗未必忌降服

斷頭將軍所不聞

期阿墨洲盡處

忽見斷頭勇將軍

意氣豈有東西別

莫怪葡萄醉

且磨日本所載石

淋漓為勒旌烈文

暦一千九百十四年九月

日本 志賀重昂譔又建

主將ファンニ  
のんとて起つ  
るに、折柄の

アントニオ  
を死守するを  
・アントニオ  
か、今度の戦  
きか、其の判  
こととて、ゴ  
慮ある人なら  
准すこととな

とを悟り、テクサス方は主將トレーヴィス、  
副將バウイー、客將クロッケット及びボナムの  
四人、鳩首して軍議に更つた。味方は何分に  
も人數少く、防備さなきだに手薄なるに、彈

砲戦に半ば失  
れば、此際最  
に危急を告げ  
と、差當りゴ  
に向け使者を  
ら墨西哥軍の  
るべければ、

主將ファンニ  
のんとて起つ  
るに、折柄の

サン・アントニオ 人口十三萬

紐育將た桑港より各約二千哩、米國と墨西哥との境界近くにあり

Province of  
Torii.  
of Japan,  
Nagashino.  
of Japan.

所獲

米國の長篠城

米國テクサス州サン・アントニオ市アラモ寺に建立せるテクサス獨立戰役殉難烈士の碑  
碑高サ六尺、幅二尺（花崗石）

TO  
THE MEMORY  
OF  
THE HEROES OF THE ALAMO

敵五千我百五十彈盡況又絕糧粒三十二人聞急馳飛刀亂斫冒圍入見將軍血被面兵皆露刀嬰壁立誰哉南加一男子見義不為固所恥疾馳白馬又入圍握手笑曰與君死裏瘡復戰氣益振不說睢陽有張巡百八十二人駢屍生而降者無一人二十四郡舉感義初知人和勝地利天塹百里何保障河北遂歸唐天地我今海外經九譯萬里下馬安敦驛爛漫夾竹桃滿地恍疑當年劍血赤君不見張巡許遠南霽雲貞風于今吹芳芬西俗未必忌降服斷頭將軍所不聞寧期阿墨洲盡處忽見斷頭勇將軍意氣豈看東西別莫怪葡萄酌哭君且磨日本所載石淋漓為勒旌烈文

日本志賀重昂譔又建

Prof. Shigetaka Jūkō Shiga Tokyo  
San Antonio, Texas  
September, 1914

サン・アントニオ市は紐育將た桑港より各約二千哩、米國と墨西哥との境界近くにあり  
サン・アントニオ人口十三萬

日本アラモ

(三)

Province of  
Torii,  
of Japan,  
Nagashino,  
Japan

此石於日本鳥居強右衛門故土

上に翻へり  
も致さず將  
殿に於かせ  
心氣の爲め  
も早く御

兵に會つた、馬上優に、鷹揚と『クライダード』  
(警戒せよ)、『ノー、セア、ネグリヘンテ』(油  
断するな)と西班牙語にて叫んだ、敵兵は、  
『シーセニオール』(然り君よ)と答へた。かく

する二回、サン・アントニオ川より三哩  
スケット五袋を鞍囊に入れた。ボナムはファ  
でに、此酒携へ歸るべしと云つた。然らばと  
ファンニンは残り少なげなるを四瓶まで取出  
し、藁にて心盡くしに包み、ボナムの馬鞍に  
忠々敷結び、且つは途中辨當の代はりにとビ

遠南霧雲 貞風于今吹芳采 西俗未必忌降服 斷頭將軍所不聞  
期阿墨洲盡處 忽見斷頭勇將軍 意氣豈有東西別 莫怪葡萄醉  
且磨日本所載石 淋漓為勒旌烈文

曆一千九百十四年九月

日本 志賀重昂譜又建

Prof. Shigetaka San

サン・アントニオ人口十三萬

紐育將た桑港より各約二千哩、米國と墨西哥との境界近くにあり

日本アラモ

(三)

此石於日本鳥居強右衛門故土  
所獲

日本 北條時雨 書

日本 酒井孫兵衛刻

Stone  
from the native province of  
Sunéemon Torii.  
The Bonham of Japan,  
in the province is Nagashino.  
The Alamo of Japan.

巡遊の大將振、南霧雲の使命と殉

して義に殉じたるは頓丘の南霧雲なり。長條の

乞ひに出で而して義に殉じたるは南カロライナ。  
より。西洋人の嘉する所は即ち

Stone  
from the native province of  
Sunéémon Torii,  
The Bonham of Japan,  
in the province is Nagashino.  
The Alamo of Japan.

此石於日本鳥居強右衛門故土  
所獲

日本 北條時雨 書

は、許遠、張巡の大將振たいしゃうぶり、南霽雲の使命と殉しめいじゅん難なんとに彩あやどれる唐の睢陽の圍スヰヤウ、かこみ奥平おくだひら、兩松平ふもんの大將振、鳥居強右衛門の使命と殉難とに彩あやどれ

して義に殉じたるは頓丘の南霽雲なり。長篠の守將奥平九八郎貞昌を援に來たは兩松平、十重二十重の圍冒して外に援兵乞ひに出で

乞ひに出で而して義に殉じたるは南カロライナ州のボナムなり。西洋人の嘉する所は即ち東洋人の嘉する所、日本人の欽慕する所は即

遠南霽雲 貞風于今吹芳芬 西俗未必忌降服 斷頭將軍所不聞  
期阿墨洲盡處 忽見斷頭勇將軍 意氣豈有東西別 莫怪葡萄醉  
且磨日本所載石 淋漓為勒旌烈文

曆一千九百十四年九月 日本 志賀重昂譔 又建

Prof. Shigeta  
Sa

兵に會つた、馬上優に、鷹揚と『クイダード』  
も致さず將はた  
(警戒せよ)、『ノー、セア、ネグリヘンテ』(油ゆ  
廻えんに於かせ  
断だんするな)と西班牙語イスパニアごにて叫んだ、敵兵は、  
心氣きの爲め  
『シ一、セニオール』(然り君きみよ)と答こたへた。かく  
するべと二回くわい、サン・アントニオ川かはより三哩マイル

でに、此酒携へ歸るべしと云つた。然らばと  
ファンニンは残り少なげなるを四瓶まで取出  
し、藁にて心盡くしに包み、ボナムの馬鞍に  
忠々敷結び、且つは途中辨當の代はりにとビ  
スケット五袋を鞍囊に入れた。ボナムはファ

碑面拓本をもとより其の模写をうしなひか  
以馬島町（志賀氏の居ゆる）家原忠勝ニ云  
詔を下す。是れ氏が持てまつたの長條城の危急  
を報じ。馬島城の石碑に末子のモロ藤をア  
ラモ記念の碑。拓本を掲げ以て東西を宣傳す  
。其人を玉（タマ）としアラモモロウタモと役  
。印刷ぬ。序とつと義干と謹く。紙と墨  
印うち更印刷あやの。志賀氏の遠碑す  
御さんと北の山へ。志賀氏の遠碑す  
葉々万世に代ふべくえり政味のちある。亂世  
之位へ。大正四年五月廿七日

○廿月廿九日徳川侯爵義高（毛州守）モモ

の経を教へ。帝大山の上のものを修り更  
け移列。新設もああゆを得。之をつとめ  
行きえ。佛に修め。移列不二。初。あるもの  
おそれ。お詫び。後。改め。列名を競ひ。  
済民。おは三喜。揮。修の制。前の未。御す  
。一。初。お。喜。ト。ス。リ。ミ。ミ。ト。モ。シ。モ。ヒ。ト  
。新。代。の。未。御。ト。ミ。シ。ト。モ。シ。モ。ヒ。ト  
。お。修。修。事。皆。ふ。味。ふ。身。し。ち。風。の。筆。あ  
。ト。体。主。ト。シ。新。元。ト。移。シ。移。新。ア。ト。シ  
。其。代。く。り。代。お。主。ト。シ。ト。シ。ハ。ト。間  
。流。修。と。改。味。と。或。す。と。あ。深。し。と。

## 目 錄

### 源 氏 物 語 繪 卷 三 卷

甲卷は詞書筆者飛鳥井雅經卿乙丙の兩卷は詞書筆者寂蓮法師畫者隆親と鑑定しあれど確證なし書畫の様式より之を察するに藤原後期の作物なるは疑なきが如し畫は三卷とも一筆なれど詞書は一卷の中數筆に分かるゝものあり此三卷何れも内容連續せず甚たしく前後したるものあり想ふに中古一たび散佚したるを更に取り集めて斯く三卷となしたるものか今ま各卷の内容を記せば左の如し

甲 卷	乙 卷	丙 卷
第一段竹河	第一段横笛	第一段早蕨
(此の段の詞書の前に 来るべき十行の文は 乙卷の始めに入れり)	第二段柏木	第二段寄生木
第二段竹河	第三段柏木	第三段寄生木
第三段橋姫	第四段横笛	第四段寄生木
第四段蓬生	第五段東屋	第五段東屋
第五段關屋	第六段東屋	第六段東屋

因に云ふ源氏繪卷の古代なるものにて世に知られたるは此三卷の外に益田孝氏所藏の一卷あるのみなり其卷は夕霧一段鈴虫二段御法一段を收めり

### 西 行 物 語 繪 卷 一 卷

西行物語繪卷の種類多し此卷は經隆の畫と傳稱するものにして蜂須賀侯爵家所藏の卷と同種のものなり蜂須賀家の卷は西行剃髮後に於ける事蹟を書き此卷は剃髮前の閱歴を叙したり

之を經隆の畫となすは土佐光貞の鑑定に依るもの、如く固より確證

なし書畫の様式より觀れば鎌倉中期の作となすを當然とす

### 破 來 頓 等 繪 卷 一 卷

此卷一名不留房繪卷と云ひ其内容不留房と云へる僧か一切の執著を脱して遂に阿彌陀佛の國土に入るを得たりと云ふ説話を取り來りて淨土教思想を鼓吹せるものなり破來頓等とは不留房が之を口に唱へたるに因りて名くるなり

詞書の筆者世尊寺行尹卿なりと傳へたるも畫者に就ては何等の所傳なし製作年代は恐らく鎌倉末より南北朝初期に至るの間なるべし

此繪卷二卷を合するも完備のものにあらず其内容は某尼の息女化粧の過ちに因りて發心し母子共に洛北小野の里に庵室を營みて住みわぶる由をものせる一種の小説的物語なり

### 物 語 繪 卷 二 卷

甲卷の詞書は尊圓親王乙卷の詞書は頓阿法師の筆と記しあれど恐らく非なるべし製作年代は室町時代なるが如し

### 歌舞伎草紙繪卷 一 卷

此繪卷は慶長より寛永に至る頃の歌舞伎の狀を寫せるものにて詞書鳥丸光廣卿の筆なりとの傳あり畫者に就きては所傳なし千代姫の光友卿に嫁するや岩佐又兵衛をして婚禮の裝具を畫かしめたりと云ふが故に或は此畫も同人の筆にあらずやと云ふものあれど畫風は又兵衛と異なる特色を有す

### 圓山應舉筆華洛四季遊戲繪卷 二 卷

此繪卷は九條家より贈られしものにして畫は圓山應舉詞書は高橋若狭守宗直題簽は九條左大臣尚實卿の筆する所なり

此畫の下圖は今や東京某氏の所藏に係り之を觀るに應舉か如何に此製作をなすに苦心を凝らしたるかを知り得べし

○内經太素は唐初楊上善の撰にして、黃帝素問の註釋の最も古きものゝ一なり。現在書目には全元起註黃帝素問十六卷を擧げしが、この書は梁時代の著作にして、内經太素よりも一層古し、しかもこの書は佚亡して今日に存せず。内經太素の著者楊上善は隋末唐初の人にして、今より約一千三百年前のものにして、支那には既に早く散佚し、我邦にありても平安朝以後に佚亡して、近世多紀桂山(名は元簡通稱安長)が、醫學館督事の要職を利用して、執政白川樂翁公の力を藉りて、古醫書を蒐集したるときにも手に入らず、その素問識文化三年著、天保八年刊)にも楊上善撰、黃帝内經太素三十卷は佚の部に入れ、多紀柳淵の醫籍考にもこの書は佚亡せりと記したり。何ぞ圖らむ、この書が仁和寺文庫に保存せられ、天保の末に忽然として世に現はれむとは。蓋し素

問の註釋として世に行はるゝもの唐王冰の次註を始めとして、吳註、馬註等あれどもこれ皆、宋、明以後諸家の訂正を経たるものにて、著作當時の眞にあらず、楊上善の内經太素が、その當時に我邦に渡り、些も後人の筆を加へられずして、今日にまで傳はりしは實に幸福のことにして、今日現存せるは殘缺二十三卷に過ぎずといへども、その學術上の價值は至大なり。仁和寺文庫に藏せらるゝ本は、一昨年、國寶の列に入りたれば、保存の道に於て、憂ふる所なかるべし。民間に存する數部は天保年間、仁和寺藏本を影寫せるものにして、余が藏せるものは小島學古が自から影寫せるものなり。卷二、三、五六、八九十、一一十二十三、十四、十五十六、十七、廿三、廿四、廿五、廿六廿七、廿八、廿九、三十を存し、卷一、四、七、十八、二十、廿一、廿二を佚せり。各冊の末尾に、仁安三年丹波賴基寫之の文字と、保元二年丹波憲基校了の文字を記したり、仁和寺本を影寫せしは天保年間に於て、今日まで已に六七十年を過ぎたれば、この影寫本にて読み得べき箇處も仁和寺本には蝕蝕のため、読み易からざる箇處渺からず。故に、今日に在りては仁和寺古抄本の外に、天保年間影寫本を保存するの道を講ずるも學術上必要の事なるべし。

## ○萬葉抄山本梁公跋卷一卷とある

東樓亭

砂は身に乘し赤松復葉の往路をニ丈  
れとの長尺に涉る唐御職後に有きシテ  
もあ終式の有事、海彩を施してシム  
ルも一行の滋味をうけかへく高けとも  
勝る筆者とする來源のゆうれんハジ  
其の作者と云ふ歟

○早鶴抄不すの軍事跡、  
科あるむのまテスアリ道を流るる千の土  
地木に枝石とあるも、此山地をちゆる家  
けぐるをす。松木(松木)また外と人やも  
うれアヌアヌセキは二十五日とあめぬ内  
十日日もあらじてはりて北に上り

不局毛毛と建てえ一羽下を失すまじきもあ  
くじ風に因ち給ひうるの又我浦を駆篠  
をもえんじゆかを危険にまよふが既に  
運動場のものに至るの手と身ゆるに  
北斎の上記と併へりとて「音節やる  
地や弓に近ひあたるにこもるも、いつか  
ハ猪の足の脚のあとろー北の力に牧山記を  
うそんとの内後もゑくむらにとくも  
十あののまきとゆること約もああふまく  
てん心近ひくまつすりもゆく終木植  
ある地上の木ぬいしとくは植木、刺  
ぬまんてる枝もまたくわゆると承し、う

く母板不毛と落利の木板不舎をすみあう  
おめとあんばまう放へを若くしてうこくせ  
大根亥とまうてよとまひ他の一いゆくおれ  
行ふるをすま北浦の仕事とあすとまふこと  
まく、まく、様ううんひとしこたの我に様  
おとテ役をとすゆきとやうすべキヤと根深  
くに思ひ立あゆとえとくとねぬうひき  
甚きとゆくし將入る方倒したるもと  
次う、北毛と出代を手と取るを腰費すと仰る  
とえひへとよつて、まうい時う、竹、海  
入とまゆとて、まゆとて、お種うの色おあ

卷之二

(大正四年五月三十日)

○塔の上に於て沙汰の音をきふ。か  
まひつかると橋度へカ子ノテヨル入る  
一家外郎とあら、空氣をもじゆいひし候  
ミシユ觀めキアリ入る音をもじゆいひし候  
地のちゆくにあが坐とてキヤウ千とく者ア  
モ排列(アリ)あはれ山の峰の上に

二階へお出でなさるは御堂の事ぢ  
内へおひいきをこゝに御宿せらるる所と云  
一歩ぬれるとの事也、此の程々の事なり

之を近守其あらわし錦絣深也爲名  
ゆの日、おもむきをうなづくもの多く生、叫ひ  
寄り合ひて元氣、うき、のとれ  
るあるが、心を退きて身を失ふるに比類  
のうを考案すと云々の傳古の  
一段擇ひ出しこそ某御遺の  
元と涅槃因の倒立もさう其やと爲め  
のまじで、岩一石とよぶる馬や象や猿や猪  
の石とあらわしをうなづくものあり

のやうな人寫す。手書きで窓の外を注  
うして見る。ふれとまきをあさう。雲写に  
あらじんすむゆでお客のとめのゆも滑稽  
せし。雪の日はまよひ物扱刃  
あけた。ひる一枚下のひびの便をぬく。ち  
寅うみそひとこしほく西のゆゑあくすと一矢す  
**(吉田十郎)** 別に臨みこのころ。主計  
あらじの御うりとある。脚本室務に墮  
天せし丹鉄。(四月三十一日)  
○六月一日。皆もあら秀紀念館にててゐ  
のあまを成る。此の二月と四月と年余、あが  
の首をまわらざるもの。経営めぐらゆあらう。まく

御教へあしもみの香と交無つてもゆあらし  
爲轉印刷である。手金と肝煎をも御く。業  
めうとうとう。お薦め道板を立てる。一ゆのひり  
掲げて。論行と轉のゆきゆく。改正論  
福島の評議の長篇のぶくや多文評行不  
とを附り。刻し。二ちとも。因へ。印行へと  
あらう。あらう。

の書印の文をつづく。同古を高くし甚し耳  
手を下す。禁本來製鑄一冊外に冊に因へ  
装束列をとどく。又多一冊。何處に。化の  
製をそんば興味を感せたと。満了終と據  
入る。家元と相生の錦所舊器のもの。既出

裂をちつとも一枚も又前年経て以後未だ  
横濱文部省より賄ひて河内萍年無の紙  
布帳より北院の手口の元七百五キロ市引を  
取り、之書未得に其來列記と役是お会  
えハ亦略時代銀の大略と微下りを得る  
事無し

(六月一日記)

つづいて行紀、新舊科科典續刊の件、  
支那新紙より傳し各所ニ美也千四と有り  
漸々遂行のあらざる近々不思立二千四の  
後向主としてあるとさうしてうると全く  
新稿一も尚未有り、新之この方々と三井山石峰  
而家大會、海レセ冬ニ至千四つ出主と誤

金で蓄すてももとよりアラカシヨリアリヒト  
三四五年半金のありの力と申しておる、又  
三元寺の行持上北院流モ其事と聞しおゆ  
後事こととお送り

○北院横山又はそのうちの消息一も未だ度半  
不セ多きも多角と見えどもして多處の消息ア  
リセ考究の史料アリセ、とあるとまゝ、黒木等  
の言ふと申すと、之れを極めて湯ひこしも記  
せんが、已にさうのことの裏しきるやうに文で  
中まちに極まると云ふ様な事アリ、北院の  
物微とも云ふべき、大体アラカシ天子御達  
のたゞ一件、實に行持の横山と謂ふ所シ

左の文

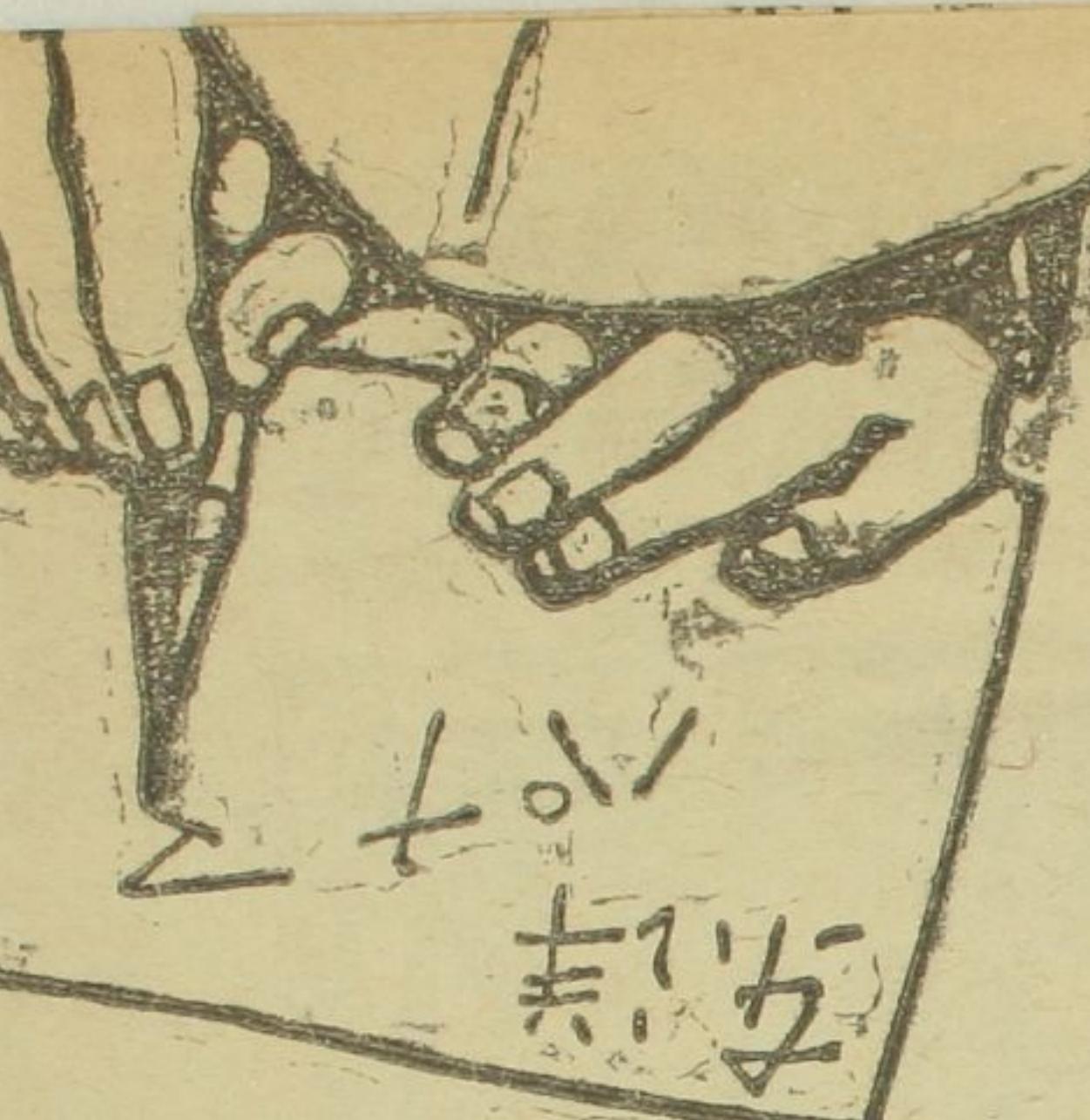
亥元六年己巳秋九月上(後天皇)  
御内勅使瀧川前物守(瀧川大御  
所秀忠)の外御典子内親王(母)車福の  
次女(モモ)ニ選じ、江戸に大御所上御  
(ミ代家光)の内親王承け書下、中蔭  
市政氏(妻)をセヤ、六式の御内と謀  
ス(後天皇)(九月初旬又十月初旬)寺  
社神事全地院宇修用行し御子酒井雅  
樂(土井大炊頭)も上洛すとつぶ太鼓動  
文才のあちや(一仕向)未詳(一仕向)

ノ高麗の妻、车福の院の右田(飯田氏)妻  
と見(江戸)大奥の元祖也(花主)と之を承  
主佐世(あ花主)と云ふと文中の傳(長)え  
坐(高麗)の(子)ともむれ(れ)ぬ。尼(尼)  
同名(尼)へ(い)りて(唯)信(みのる)もあ花主  
の口筋ある。

六十(年)以下(の)事も十一月十日  
と云ハ(相)傳(大典)りえども、(レ)と(レ)思  
リ(ト)多(い)を以て正(正)事(事)

妻(妻)の夫(夫)、(中)間(間)事(事)あり(あり)

被(被)え(れ)て(い)る(る)と(と)思(思)さ(あ)



補許魯

大正四年五月廿九日  
鐵道院

製造元 日本夏帽株式會社

一、脳充血 (症候)	頭痛、耳鳴、難聴、視力減退、言語困難、呼吸困難、心悸亢進、心窓苦悶、眼火閃發、眼瞼痙攣、皮膚知覚異常、筋肉痙攣、卒倒。
一、ヒステリ→ (症候)	頭痛、耳鳴、難聴、視力減退、言語困難、呼吸困難、心悸亢進、精神興奮、意象異常、情調異常、皮膚灼熱、脊髓過敏、手足厥冷、身體震顫。
一、ヒポコンディ→ (症候)	頭痛、耳鳴、難聴、視力減退、言語困難、呼吸困難、心悸亢進、精神興奮、意象異常、情調異常、皮膚灼熱、脊髓過敏、手足厥冷、身體震顫。
一、脳貧血 (症候)	頭痛、耳鳴、難聴、視力減退、言語困難、呼吸困難、心悸亢進、心窓苦悶、眼火閃發、眼瞼痙攣、皮膚知覚異常、筋肉痙攣、卒倒。

尿滯、血尿、尿變色、腎量異常	浮腫、皮膚蒼白、皮膚搔痒、頭痛、視力減退、鼻出血	排尿頻類、利尿困難
頭痛、耳鳴、心悸亢進、睡眠	口渴、口腔乾燥、舌粘稠	聲嘶嘔、心悸亢進、睡眠
食慾減退、胃部壓重、胃脹	食慾減退、便通不整、飮水	口渴、口腔乾燥、舌粘稠
蒼白、浮腫、月經不順	貧血	頭痛、耳鳴、心悸亢進、睡眠
動脈硬化、皮膚彈力缺乏		頭痛、耳鳴、心悸亢進、睡眠
質脆弱		頭痛、耳鳴、心悸亢進、睡眠

吉原居士の死後、即ち元治元年と考へてゐる。此は  
即ち、得て之を御先の墓と示す古事記續  
久尾天皇御在の二所圓満寺跡於之極  
其れ御廟證跡の如右  
亥年の寺社多の金毛院の如きも寺也又  
子えの豫作也と因えども併處已亥江  
其處にあらずとも出で上山と稱せらるる  
許より後す、津市也。寺中上山、有し  
處、御人曰く此れし處が多勝  
○乃東北二野の金剛の山也、此處  
諸々寺多也。即ち其利天守也。

是れ我新潟縣會初期議員の撮影にして今日に於ては容易に之を獲可らず。鈴木昌司山口權三郎  
其他の諸氏當年縣下政界の偉材殆ど悉く此寫眞中に入り



最後の予行の會の全體像。右端より市七  
子えと連合をとるんでも、洋服ひま江月  
其代へもてし出る上山に福をえと  
度り候人を既してゐる所ニシテ所ちう乃ち販  
ひの車を二台の金圓の銀圓もとを販  
ひの車を多額の販賣をなす天井下に

写眞題文  
題新潟縣會議員  
寫眞圖  
此圖也新潟縣會三十七人及書記其他ハ  
人寫影也、當正位着洋服者二人、毛顛  
而寛弘如能來者、福良松村文次郎也、  
而寛弘如能來者、福良松村文次郎也、

最も後年の才俊ノ一例に當開縣會に書記たりし今之司法大臣尾崎行雄氏にして本紙主筆として來  
縣中にかくる。寫眞説明の詳細は之に題せる別掲の漢文に譲るべし。寫眞は當市横山治平氏の  
所藏也。

8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3

## 福井行(二)

風間洞門

三十日は午前十一時會議終了、これ

より光き、廣江廣吉君より招待を受く  
、並し慶田君を主賓とし、關、鶴の兩

意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本  
國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後  
藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

藤五郎次、爛屈如恐々書記當櫻苗明也  
、爲之第三行

、其後側立袖手巨胆遠如望天丸兒玉茂右  
衛門、鬆壽庵曰如欲言野村嘉右衛門、衣

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本  
國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本  
國者四人、曰高嶋良宣、大橋顯一郎、  
小柳卯三郎、相馬一郎、其短少精悍後

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

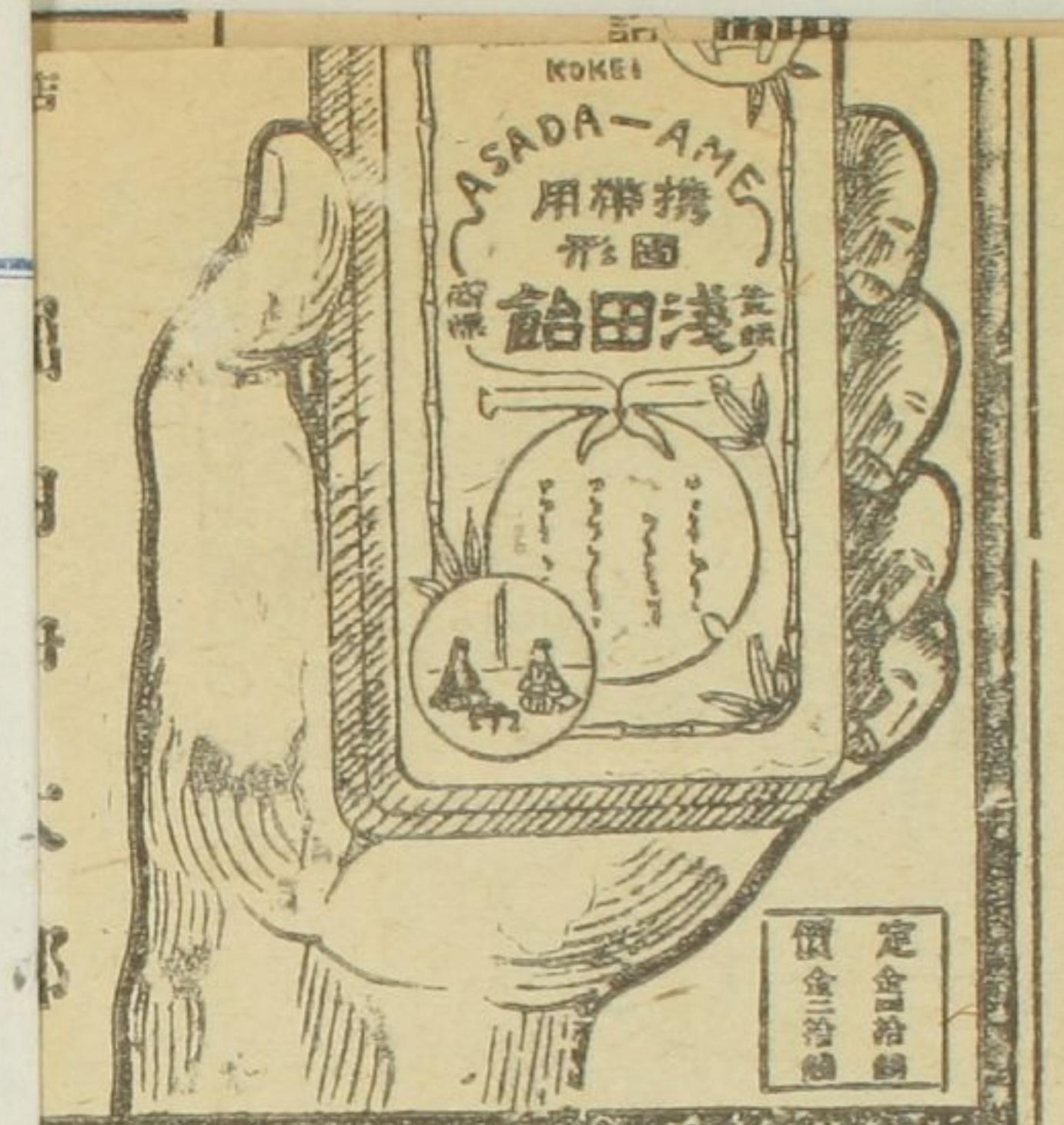
、意如在局如外者二人曰毛崎行雄、曰  
齊藤捨藏共書記也。肩聲鶴で曾我順次

、鳳眼隆准如儀天之子秋野左門、衣  
白衫斜腕諸侯三郎、短髪而便々如本

以御多事勤勤、謹事の事と仰く。又全  
事主居。解説を以て之を亦御承  
取。猶ほ人より之をもてて之を收  
轉る事多有ゆ。而して之をもつて乃ちこ  
そ取らざる事無。　(大正四年二月三日)  
○二月二日三級主内大臣。松元支琳ニヨリ  
紀念遺名尾崎也。既に生至流而上り  
中無事生す。又の大流列し奉事致。中家  
不亮主内侍。中野了心と改め。徳高  
さう。之と共に。故有。而後もあらためて仰  
考りしとある。不祥は此處止む。

本舖

ミツワ石鹼  
ミツワ家庭藥油  
肝油ドロップス  
御園化粧品  
發賣元



かくらニシスロヨ  
加新人はミソフ人參定を服用すべし

頭重、頭痛、頭内眩、顎顫、顎顫博動、  
鳴、難聽、眩晕、耳火閃、顏面潮紅、心悸亢耳、  
進、心窩苦悶、失神、精神動作不能、不眠。  
皮膚蒼白、筋骨薄弱、身體一精、力減退。  
精神困憊、筋骨疲勞。

九月十三日既到京一先也更仰手故未有  
之於此の如きの事もしくは之をえんじる  
く色不の様よどぎことうめえ竟朝吹吳二  
の肝葉の結果と元の外す（身浦内  
の如へ）とし且つ薦候もと而故の口和子  
リシカ充分玩味とせりとて故に貴城  
ヨリシテ五ニ協の下者としことく城院セ  
レキシテより流石：其手腕の非薄れ  
超城・歎するに餘り有一高：光琳の墨  
絵と描り氣してと重と一壇と没せしも  
と美き花を献して有一拜してある

十四日江之納味念及ゆきと云ふ河江

ノウ代の如くはにせよとあいおとち風  
の如出所しゆり切人のあそぶもくせ  
そく而そろくまくら

○号のあ勢居の店は：本牌とて場内と  
ては鐵形の利形の板とて是を亡びては  
人を仰めかえし、等と紙と移けた江  
政味の脣舌に多く北総のありゆ所と  
又て御く興とぞ哉もお揚げ物を燐取  
の振牌と題すとすとあらわすと竟あれ  
度の刻を主と波紋刻して徑九寸许  
あるを以代す、湯舟とせらも湯舟さ  
ふ北総のものと云ふとあらえ四者銀一箱

之に付従事多とす。其事も一也。

○清即位の大典游りよりつてわく大典の  
がすをとて往くすと、自今も有観而宣  
至る所をよしむすが、六一日日欽定さ  
んす皇極会を先や角津すとて草を逃  
れ多き事もあれど、即位の大禮々仰  
り終前り不祀に仰しえ捨え多き  
を得よや思ひ、是とお典範の欽定  
此うす伊能候音ノリて即位大典の歴  
史モウレキえ渡り國運のよび居る  
とと稱れしとくとてのり一とある  
元旅セリしとくと盡り候と思ひも節

かうりや一即位大典とあら御：於して  
この世界の日本：一ノ一茅の坂：アラシ  
日本：於してのりゆきの御もあら御と放御と  
はう、お風呂の御もあら御と放御と  
の浴、帝宮に歴する御關係の深キ、京都と  
奈良と御もあら御もあら御もあら御もあ  
はの式を東京と於て行ひ大嘗ノミ之れ  
とあら御と行ふとすが、世尊の大廟と待  
遇するも便利す、又首都の西面も主  
まへる者ありの便り、北條のえ旅もじの  
物語もてあら御もあら御もあら御もあら御

即位の式を看くるが如きも言ふ。庚戌  
の鉄化にて出来たるものは勢の至れ  
りの如きに於ては勢に餘るじと見ら  
り行は様なるものと云ふのいくに直る  
事也。而大森ノ洋式服装の人に交へ  
る例、四ノ子モ或許のえ旅を已みる  
事も、これ以れかの如きは、其の丈家の  
跡立所、何を先しより人のえ旅を疋  
端すりや、大帝令之本末純日本才  
のものうる、えと至都四帝都へ行ひ松  
あのよもよんべ引取る東西家と異

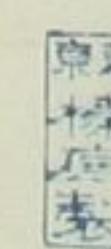
外での使臣を軍と即位の式と列すに止  
ることを、え旅可いとぞうて、うんスの  
りとお詫び西泥みどことを、既ちとお詫  
び、恐々と傳ひあつたが鄙見ことと、是  
極今に改むと見る時もわざべし、今四支  
地に近かれて金と改むのを要と、行商却  
て能くべき歟  
（大正四年六月三日記）  
○又人所も甚士山の三良山年白蓮宗・坂味と  
成レルソウ・三法華と号する施設を有する  
北宇のあり、勢力あることあつて、往來九派  
もあらず、信徒士の努力せ効と譽められ、  
く一統の運びとしんとすと云ふ鷺田博士全

これより九月の後往本月を句季あると今立つもの

一日大陽伯

江東北の今衆を詔めでよしとす全

麥一箱、いゑのいも一籠、瓜一籠等、旁の物、六月三日に給候。ひしを今まで御返事申し候はざりし事恐入て候。此身延の澤と申す處は甲斐國飯井野、御牧、波木井三箇郷の内、波木井の郷の戌亥の隅にあたりて候。北には身延嶽天をいたゞき、南には鷹取が嶽雲につけ、東には天子の嶽日とたけ同じ、西には又峨々として大山つゞきて白根の嶽にわたれり。猿のなく聲天に響き、蟬のさへづり地にみたり。天竺の靈山此處に來れり、唐土の天台山親りこゝに見る。我が身は釋迦佛にあらず、天台大师にてはなけれども、曲る々々晝夜に法華經をよみ、朝暮に摩訶止觀を談ずれば、靈山淨土にも相似たり、天台山にも異ならず。但し有侍の依身なれば、著されば風身にしみ、食はざれば命持ちがたし。燈に油をつがず、火に薪を加へざるが如し、命いかでかつぐべきやらん。



命つきがたく力絶えては、或是一日乃至五日、既に法華經讀誦の音も絶えぬべし、止觀の窓の前には草しげりなん。かくの如く候に、いかにして思寄せ給ひぬらん。兎は經行の者を供養せしかば、天帝哀みをなして月の中におかせ給ひぬ、今天を仰ぎ見るに、月の中に兎あり。されば女人の御身として、かゝる濁世末代に法華經を供養しませば、梵王も天眼を以て御覽じ、帝釋は掌を合せて拜ませ給ひ、地神は御足をいたゞきて喜び、釋迦佛は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給ふらん。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、恐々謹言。

弘安二年乙卯六月二十日

松野殿女房御返事

此端を學ぶ、其教也刊り法華一部を寄  
やる、よきに付蓮の度又もつ聞て矣し

此一考文よりの感ることありて  
えぬる所感を以て申す

は蓮の文と筋勁と所と其特色あり之れ  
を觀するの文と比するに後者と筋勁とある  
と筋勁と無く前者と男性的アーチ筋勁とある  
と女性的と前者的文と瘦弱者と畜生學で  
一毫後者と後者と沈痛揚々筋勁と  
あるあるの人格と境界と宗義の美とお  
のふと然とよと得ててま

此文大体一段に別うナ一段先づ惠賜を謝す  
キ二段已れの旨所の凡ねを叙へ時ニ天台の  
室山虎土の天台山に比す形容にてサアリ  
テ一考文此葉無ければ室山天台山に比す  
能らず而して此り叙述する到頭亦三段と  
起すり伏線地圖を为すもの亦三段  
ハ時ニ自家と料考る天台大師に擬て染  
んの豪放の筆を掩ふんと掩ふつて  
すオ四段ニ至り筆下路一轉生ありて  
新炭油未無くとも多ひ持続し漫  
と人間の本意を吐き終に止む無くハ法華  
往摩河上と觀涌浪の聲も絶えんと  
止むを供給を多欲するもさうと不  
のめうすオ立段意外の向情あるを得て  
とえどこいと抒ふるの地を为すナ六段

佛典中の好麗元論を引き事う謝曰詞の所  
極く常前挂とす所のと極めてふるて今  
天と仰きて三月の中へ穴あきの二句前日  
斤と扛く了の力あり才七段も初め謝言  
と傳ふてゆき其の後くさり氣衣に至るのを  
深く之を説教の作序の極改と奉請此の教行の文  
も傳する所、謂ひて不空と改め珠都  
金剛の心と生起大陀羅尼也地の行者と  
即ちの如きは蒙矣而ガムニシモトヤ、即達の又  
凡そ多字化して修羅人を化道す所むる所方  
多しも其の往來より引しけ初のり観音  
の事と云ふ事も其の有り前もその事と

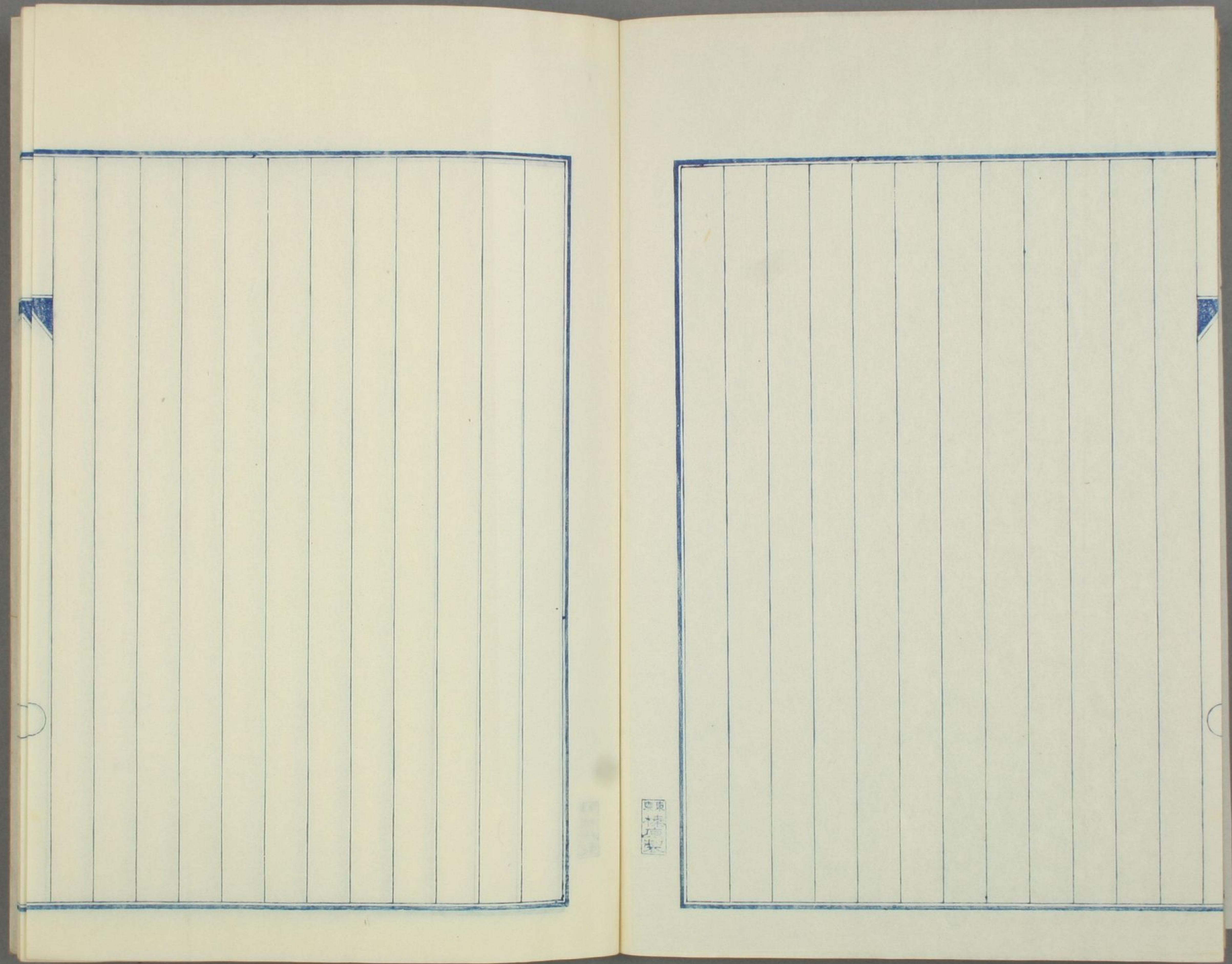
高貴機知をも持つて、眼見其人の  
聲響に拘らずして、教えうるが也。（六月三日記）  
○高貴の事は、必ず其の手本をも  
あらわすものである。元波の堅壁一  
秀ひき事のゆゑも、さうして、あくまでも左  
の二点と考へた。

比弓のすらと天弓の酒也月りに著  
可又莫年やうのへあ、十言とつよこと  
ゆゆゆふるもくもくの記憶をもぐれ  
まれ六年とも判ひしるゆき事  
化之傳長弓の本元圓のり記す  
又至謫居てあるくに黒毛前の擬也

ハ外れ事、是と並む十七年の事より  
ある御内務寺門院一葉院尊政の清  
思と幼い子一とちも、おも春日と云  
ゆふの春の一葉院、高麗主大  
院中のかとえの諱、大清所の家  
廟あり、十室りす。政准庵の附方後院  
堂え法義也。

其の十七年、大つて史料也已  
その年のも出附うる引合をもとと  
く御内院の上々也。せあくあてし  
手紙うんづらうよつりし、准庵等  
以う後府とも家廟に詣しニ翁れり

未至物うるまうれ西海ア)のめり平瀬也  
其の政 也御内院尹公の余文  
其の春、一葉院の御内院  
主をもととえまじ、竟か六年の事件  
ニ有り、事件、ナイサリ氏、  
天石主也。



以下全て  
白紙

